

巻 頭 言

首都大学東京理工学研究科
雑誌「数学」前編集委員長
徳永 浩雄

65> 「癸丑以来…」 /3

司馬遼太郎の「世に棲む日日」によると、木戸孝允こと、桂小五郎は晩年自らの経歴を語る時は口癖のように「癸丑（きちゅう）以来…」と始めたという。癸丑（みずのと・うし）とは嘉永六年、すなわち、ペリーが6月に浦賀へ来航した年で幕末の混乱はこの年から始まる。西暦で言うと1853年で今から160年前である。1853年からおよそ150年遡った1702年が赤穂浪士の討ち入りであるから、癸丑を中心とした前後150年の歴史は比較するとやはり江戸時代は天下太平で後の150年は激しく、難しい、混乱した時代に感ぜられる。

「世に棲む日日」には坂本龍馬は西郷隆盛をたてるとき、「西郷は何と言っても癸丑以来の人だから…」と云ってたてていたとある。幕末の志士のなかでは「癸丑」をさかいに「先輩後輩」の意識があったらしい。坂本龍馬や高杉晋作は、少しばかり後輩の部類になるそうだ。桂小五郎は、若いときからメランコリヤがあったといわれているが、当時の政界が気に入らず「癸丑以来の活動者でいま生き残っているのは、西郷と大久保ぐらいのものだ。古い同志はみな非業にたおれ、いまの政府にときめいている大官などはみな維新前後のどさくさに時流に乗った者ばかりだ。かれらには維新の理想などがわからず、利権だけがある」と嘆いて鬱々としていたと同書にある。

さて、ペリー来航から明治維新、さらに西南の役にいたるまでの国内の混乱した時代については、多くの歴史小説が書かれているように歴史好きにはたまらなく面白い時代である。今年の大河ドラマも半分以上はこの時代の話だ。ただ、これらの小説やテレビドラマの多くは倒幕側にしろ、幕府側にしろ、「武士」の視点から書かれたものがほとんどである。歴史の中心にいたのが「武士階級」であるから、それは当然で読者としても歴史上有名な人物のほうが背景もわかっているので入り込みやすい。とはいえ、武士でない普通の人たちはどうだったのか気になるところである。とりわけ、自分たちの同類である「学問の世界の人」がどうだったかというのは気になるところである。

森鷗外の「渋江抽斎」からは江戸時代の終わりから明治にかけての学問の世界にいた人たちの日常がどういうものであったかということが伺えて面白い。渋江抽斎は弘前藩士だったのだから、武士といえば武士なのだが、やはり「学者」であろう。もっとも私

個人としては主人公の抽斎より、かなり変わった登場人物である森枳園に惹かれている。何しろ、謹厳が求められるなか、役者に混じって舞台にたったという理由で主家をクビにされたほどの人である。さて、抽斎はペリー来航の騒ぎをリアルタイムで経験しており、「我関せず」という立場をとらず弘前藩の政治に関わっている。やはり、人にもよるが「学者」もじっとしていられなかったのだということがわかる。ここで面白い、というより数学という基礎学問をしている身にとって大いに励まされるのが、抽斎の行動に対する森鷗外の見解である。すこし長くなるが引用したい：

『学問はこれを身に体し、これを事に措いて、始て用をなすものである。否るものは死学問である。これは世間普通の見解である。しかし学芸を研鑽して造詣の深きを致さんとするものは、必ずしも直ちにこれを身に体せようとはしない。必ずしも径ちにこれを事に措こうとはしない。その矻々として年を閲する間には、心頭姑く用と無用とを度外に置いている。大いなる功績は此の如くにして始て贏ち得らるるものである。

この用無用を問わざる期間は、畜に年を閲するのみではない。あるいは生を終るに至るかも知れない。あるいは世を累ぬるに至るかも知れない。そしてこの期間においては、学問の生活と時務の要求とが截然として二をなしている。もし時務の要求が漸く増長し来って、強いて学者の身に薄ったなら、学者がその学問生活を抛って起つこともあろう。しかしその背面には学問のための損失がある。研鑽はここに停止してしまうからである。

わたくしは安政二年に抽斎が喙を時事に容るるに至ったのを見て、是の如き観をなすのである。』（渋江抽斎、その四十五より）

森鷗外の「有益無益を考えずまず純粹に研究しなさい」という見解は数学のような基礎学問への力強いエールに聞こえる。このエールの前では、私自身の「何かできたら小さい結果でもなるべく早く論文にして形にせねば…」というやり方は、いかにも小さい。何しろ、鷗外は「世を累ぬるも致し方なしの人」なのである。とはいえ「世を累ねて次世代に伝える」には何かを残しておかねばならない。

雑誌「数学」は現在 65 巻 4 号が出版されたところであり、65 巻という数はこの雑誌が 65 年間にわたって続いていることを示している。65 は癸丑以来の 3 分の 1 より大きな数字で複数の世代にわたって続いている雑誌とってよいだろう。論説の記事の専門性やレベルの高さは、数学研究の研鑽において、「世を累ねて次世代に伝える」ことについて大きな役割を果たしていると思う。国際化が叫ばれる時代に日本語で専門性の高い記事を書くことについてもいろいろ意見はあるかもしれない。しかし、私自身は母国語でこれだけレベルの高い数学の専門誌があることはありがたく、また、日本の数学文化を次世代に伝えるためには大切なことだと考えている。次世代への伝え手として雑誌「数学」がこれからも続き、ますます発展してゆくことを願ってやまない。